

—京の街道とその周辺—

(1) はじめに

京都では、約1200年前に平安京が成立すると、すべての主要な道が平安京に通ずることになり、街道を通じて、京都で培われた文化が各地へ伝わった。

これらの街道の京都の出入口は、京の七口と呼ばれ、時代によって変わるが、現在も栗田口、荒神口、鞍馬口など地名として残り、人々の生活と強く結びついている。そして、これらの京都の出入口から各地に通ずる京都の街道には、鞍馬街道、若狭街道、伏見街道、山陰街道、愛宕街道、鳥羽街道などがありそれぞれに街道町や集落などが形成されている。

奈良街道は、大津京と平安京を結ぶ街道で、東海道を山科の追分で分岐させ、山科盆地を南下して六地蔵から宇治へ抜ける街道である。山科盆地は平安京遷都以前から政権との結びつきが深く、中臣鎌足による精舎（山階寺）や天智天皇陵などが造営された。そのあとも山科盆地は交通の要衝として栄え、街道沿いを中心に発展していった。

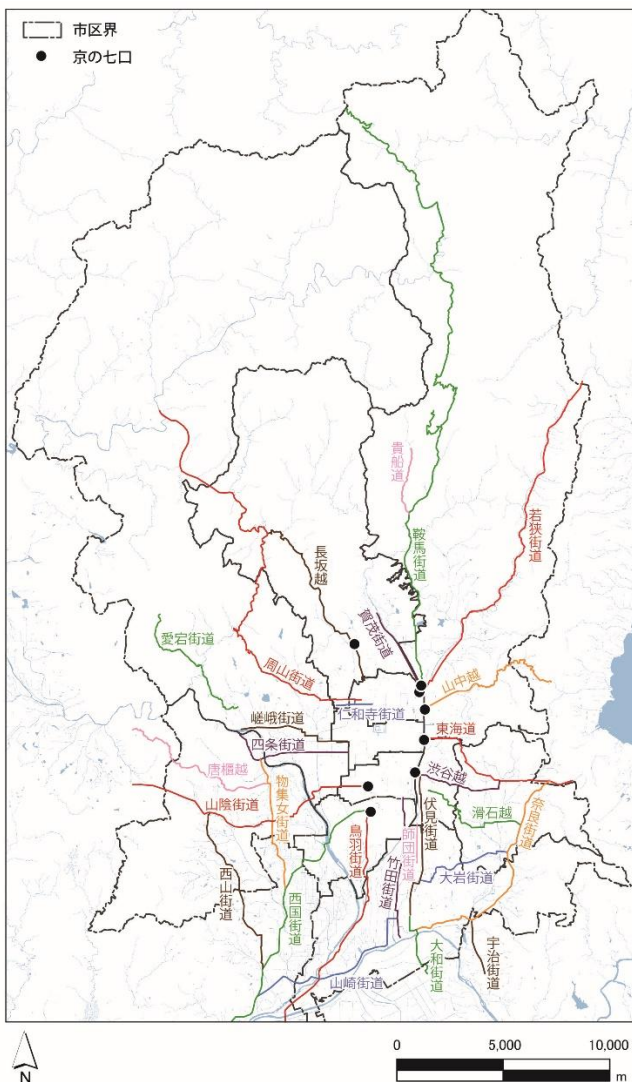


図2-6-1 主な旧街道の歴史的風致

(2) 京の街道と京の七口に見る歴史的風致

ここでは、京の街道のなかで門前の営みと祭りが残る鞍馬街道と、山里の営みが続く若狭街道で形成された京都の歴史的風致を示す。

(ア) 門前の営みと伝統ある祭りが残る鞍馬街道

京都と丹波を結ぶ鞍馬街道は、物流の道として、また鞍馬寺・貴船神社への参詣道として平安期から利用されている。この街道には、貴船へ向かう貴船道との分岐があり、さらに北へ進むと鞍馬寺の門前町へ至る。

鞍馬街道の要衝地である鞍馬は、鞍馬川に沿った山間の谷口集落である。平安遷都後、京都北方守護の寺院である鞍馬寺が創建されてからは、門前町として発展し、近世は、丹波からの炭の集荷、中継地としても栄えた。

一方、鞍馬街道から芹生峠へ至る貴船道へ入ると、そこは水の神を祀る貴船神社で知られる貴船の地である。

a. 鞍馬寺詣と鞍馬火祭

鞍馬寺の創建後、鞍馬は門前町として参詣客で賑わう。鞍馬火祭は、地域住民が主体となって支えられてきた祭りであり、今日では参詣客だけでなく多くの観光客が訪れる行事となっている。

(a) 建造物

○鞍馬寺

左京区の鞍馬寺は、寺伝では、宝亀元年(770)に鑑真の門弟鑑禎が、霊夢に感じて毘沙門天を安置したのに始まり、延暦15年(796)、桓武天皇の勅をうけ、藤原伊勢人が伽藍を造営、北方鎮護の道場としたと伝わる。寛平年間(889~898)律宗から真言宗へ転じ、天永年間(1110~1113)には天台宗となった。昭和22年(1947)、天台宗から分離独立して鞍馬弘教を立教開宗し、2年後その総本山となった。

鞍馬寺仁王門は、入母屋造丹塗りの和様楼門で、寿永年間(1182~1184)の建立と伝わるが、焼失し明治44年(1911)に再建された。昭和38年(1963)頃の写真に、仁王門が写る。



写真2-6-1 鞍馬寺仁王門

○由岐神社拝殿<重要文化財>

鞍馬寺の寺域内にある由岐神社は、社伝によれば、天慶3年(940)にこの地に鎮座したと伝わる。

拝殿(重要文化財)は、慶長12年(1607)に建築され、懸造、檜皮葺で、左右二つに分かれて中央に通路のある割拝殿わりはいでんの形式となっており、桃山時代の代表的な建築物である。



写真2-6-2 由岐神社拝殿

(b) 活動及び市街地の環境

鞍馬火祭(市登録無形民俗文化財)は、由岐神社において毎年10月22日に行われる祭礼で、平安末期、祭神を京都御所から鞍馬の里に迎えたときの、村人がかがり火を焚いて迎えた故事によるとされる。

『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)に火祭の様子が詳しく記載されており、神事の模様がうかがえる。

鞍馬のまちの各所に焚かれたかがり火のなかを氏子の若者たちが大きな松明を担いで練り歩く勇壮な祭りで、京都の三大奇祭の一つと言われる。

火祭の準備は何箇所も前から始められる。宮司・役員等による打ち合わせも早くから回を重ねて行われ、祭りが支障なく進行すべく、綿密な計画が立てられていく。

火祭の目前となると、各家では格子をはずし、丁

寧に清掃する。屋根・壁等の傷みも祭の日に合わせて修理されるなど、鞍馬の人々の、火祭を大切にする思いが偲ばれる。



写真2-6-3 剣鉾を出す家

火祭当日は、世襲制である氏神祭祀を掌握する組織の七仲間が拠点の宿に集まり剣鉾を立てるなどの宿飾りが行われ、夕方になると各家の門口にかがり火が焚かれ、午後6時に神事触れじんじぶれが行われると、各家の前のエジ(かがり火)が灯され、子供の手松明が町を練り歩く。やがて七仲間の代表(組頭)を先頭に剣鉾、そして武者わらじを履いた里人たちが大松明を担いで、「サイレイヤ、サイリョウ」の掛け声とともに町内を練り由岐神社に集まる。その火のなかを2基の神輿が渡御し壯観を極める。また、供奉する剣鉾も見所でもあり、一本鉾のほか三本の添え柱を伴う大型の「四本鉾」があるのが特徴的である。



写真2-6-4 鞍馬火祭(御旅所)

火祭における各行事は、組仲間ごとに、あるいは地区ごとに遂行される。そこから人々の、組仲間のまとまりや地区のまとまりが生まれ、さらにこれらのまとまりを通して、鞍馬全体の連帯感が生まれ、コミュニティが形成されてきた。そして、火祭の中心的舞台である鞍馬寺の山門前と由岐神社の御旅所

は、こうしたコミュニティの場となっている。

また、火祭だけでなく長さ4mもの青竹を大蛇に見立て切り落とす速さでその年の豊凶が占われる鞍馬の竹伐り会（市登録無形民俗文化財）や初寅などでは、毎年多くの人々で賑わい、街道筋の瀧澤家住宅等の伝統的な民家が建ち並ぶ歴史的な町並みと一体となって、独特の風情を醸し出す。

平安時代から参詣客で賑わった鞍馬は、明治期の鉄道網の発達により、市民の参詣が容易となり鞍馬山が観光地化した。鞍馬寺へ向う参道は、土産物屋や旅館が建ち並び参詣客をもてなす。また、昭和32年（1957）には鞍馬山鋼索鉄道が開業し、多くの参詣客に利用される。

鞍馬周辺は、街道沿いの町家群がよく維持されて、独特の街道風景を伝える。鞍馬寺門前集落では、太い格子や深い軒、2階建て主屋と平屋の納屋との交互の配置等都心部の京町家とは少し違った特徴を持つ伝統的な町家が、谷間の街道の坂道に沿って屋根と軒を階段状に連れ、歴史的な町並みを形成する。これら鞍馬街道に軒を連ねる歴史的な民家は、地縁組織として「仲間」という古くからの組織に属しており、7つあるこの仲間により鞍馬火祭の祭列や宿飾りが行われる。

鞍馬のまちの背景をなす鞍馬山は、全山木々のおい繁る緑深い山であり、鞍馬寺の神聖な寺領でもあり、また住民が山林業を営む場ともなっている。

鞍馬川は、生活用水や非常の際の防火用水などに利用され、川面におりる石段、川沿いに開かれた畑地や川原沿いのみち、せせらぎの音までもが複合しあい、優れた自然景観を生み出している。



写真2-6-5 火祭当日の鞍馬の町並み

このように鞍馬では、街道沿いなどに形成される町において、門前町としての営みが継承されており、背後に広がる山々や川などの自然環境と社寺、街道沿いの民家が調和した町並みとなっている。

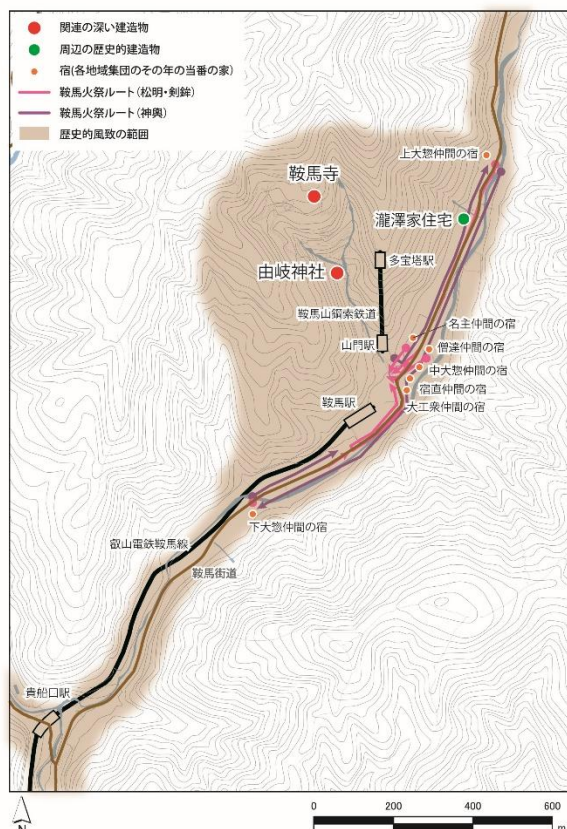


図2-6-2 鞍馬寺詣と鞍馬火祭
(宿飾りを行う家は毎年変更する)

b. 貴船の祭と川床

貴船川上流に鎮座する貴船神社は、賀茂川の水源に祀られている水の神様として古くから幅広い信仰を集めており、6月には貴船祭が行われる。また、水に恵まれたこの地では、参詣客をもてなすため、川床を設け納涼の風情を出している。

(a) 建造物

○貴布祢神社（貴船神社）境内〈市指定史跡〉

左京区の貴船神社は、貴船口より貴船川に沿って位置する式内社である。5世紀ごろの創建と伝えられる古社で、日本全国に約500社の御分霊社が鎮座する。古くから水神として信仰され、今でも農林漁業者や醸造業者らの信仰が厚い。

本社は、天喜3年(1055)、洪水による流損のため、現奥宮の地から現在地に建て替えられ、元の場所は、奥宮と称して今日に及んでいる。社伝によると、奥宮の現社殿は天保年間(1830～1843)に建築され、平成23年(2011)に大規模な解体修理が行われた。

奥宮は、一間社流造の建築で、本殿下には龍穴と呼ばれる石積み穴があり、大和の室生龍穴、岡山備前の龍穴とともに日本三大龍穴の一つとされる。



写真2-6-6 貴船神社奥宮(提供：貴船神社)

○料理旅館ふじや

左京区の貴船料理旅館ふじやは、天保年間(1830～1843)創業で、大正時代から、街道を往来する人々や貴船神社への参詣客を、川に床机しょうぎを置いてお茶や食べ物を出してもてなす。登記簿等によると、昭和36年(1961)に建築され、木造及び鉄筋コンクリート造瓦葺3階建てである。



写真2-6-7 料理旅館ふじや(提供：料理旅館ふじや)

(b) 活動及び市街地の環境

6月には貴船神社の例祭である貴船祭が行われ、神輿が貴船町内を練り歩く。その日の午後には、奥宮にある船形石で、地元の子供たちが忌み串を手に「おせんどんどん」と唱えながら船形石をめぐる千度詣せんどもうでが行われ、貴船の自然と一体となって、歴史的な風情を醸し出している。貴船祭は古くは4月と11月に行われていたようで、延宝4年(1676)に成立した『日次紀事』ひなみきじのなかにも記される。



写真2-6-8 貴船祭(提供：貴船神社)

また貴船は、京の避暑地として栄えた地域であり、鞍馬街道から分岐して貴船神社に至る貴船道に入ると、道に沿って流れる貴船川から川のせせらぎが聞こえ、夏の暑さを忘れさせる。貴船神社付近の参道には、料理料亭が軒を並べ、貴船川の川床は、夏の納涼の風物詩となっている。

貴船の川床の歴史は大正時代頃、京都と丹波を往来する人や貴船神社への参拝客たちを、川に床机を置いてお茶や食べ物などを出してもてなしたことが始まりといわれる。戦後になって今のような川床になり、料理旅館ふじやなどの料理旅館が増え始めた。



写真2-6-9 貴船の川床 (昭和45年 (1970) 以前)
(提供 : 料理旅館ふじや)

川床は、貴船川の川面いっぱい到低く床を張る。足が浸かるほど水面に近いので、清流の冷気と近くに聞こえる瀧の音を楽しみながら料理を味わうことができる。

川床は、5月から9月末まで設けられ、真夏は市内より気温が5℃以上低い。ここで楽しむ食事は、川の幸と山の幸を中心にした料理が中心であり、さわやかな川のせせらぎが情緒を醸し出し、訪れる人々は市中を離れ、納涼の風情を楽しんでいる。



写真2-6-10 貴船の川床 (提供 : 料理旅館ふじや)

貴船周辺は、貴船川の狭い谷間にあって、参拝客を迎える料理店の集落として現在に至っており、料理旅館等が清流のせせらぎを背景に神社等の歴史的建造物と一体となった奥座敷の風情を形成している。



図2-6-3 貴船の祭と川床

このように鞍馬街道では、街道沿いなどに形成される集落において、寺社やその周辺の地域で行われる祭りや、門前町としての営み、避暑地としての営みなどが、寺社等の歴史的建造物が形成する町並み、そして背後に広がる山々や川などの自然と一体となって風情のある環境を醸し出し、京と密接に関わってきた街道の門前町としての往時の姿を伝統ある祭りなどを通して感じることができる。

(1) 山里の営みが今も続く若狭街道

若狭街道は、京都の北部山間を経て若狭湾に抜ける道である。平安京以来の古道で、若狭湾で獲れた魚介類を京都に運ぶための重要な街道であったことから魚街道、鯖街道と呼ばれ、往来も多かった。また、この街道沿いの大原などは自然風景豊かな山里として、貴人の隠棲の地としても知られる。

大原は、静かな山里であり四季の移ろい豊かな自然環境を持ち、かつては貴人の別荘や隠棲地ともなっていた。

街道筋を大原から京都方面に向かうと、八瀬の集落に入る。八瀬は、比叡山のふもとに位置する山間の集落で、春の桜、秋の紅葉が有名な風光明媚な名所である。早くは比叡山延暦寺山門のため、のちには宮中の御大葬のときの駕輿丁を奉仕する村であり、その人々は今も八瀬童子の名で呼ばれる。

a.大原の年中行事と山里の営み

大原は、貴人が隠棲した自然豊かな地であり、赤紫蘇をはじめ豊かな農産物を生産している。また、この地の集落で見られる珍しい伝統行事が住民によって今も行われる。

(a) 建造物

○三千院往生極楽院阿弥陀堂<重要文化財>

左京区大原北部に位置する三千院は、魚山声明を伝えることで知られる。声明とは、お経に節をつけて詠むもので、宗教音楽であるともいわれる。最澄が比叡山の東塔南谷に開いた草庵に始まり、12世紀より宮門跡となり、梶井門跡とも称した。そのとき、天台宗の声明の道場であった大原魚山（来迎院、勝林院、往生極楽院など）を管理することになり、大原に政所を設けたのが現在の三千院の前身である。

往生極楽院阿弥陀堂（重要文化財）はこけら葺の仏堂で、久安4年（1148）に建築された。



写真2-6-11 往生極楽院阿弥陀堂

○浄楽堂

左京区の浄楽堂は、創建時期は不明であるが、安置される十一面観音像（市指定文化財）は、9世紀後半から10世紀前半にかけての制作と推定される。平安時代前期の皇族である惟喬親王が住職をしていた寺の名を継ぎ浄楽堂となった。

現在のお堂の建築年は不詳だが、お堂の前にある灯籠に昭和11年（1936）の刻銘が見られる。



写真2-6-12 浄楽堂

○江文神社

若狭街道から江文峠への道の傍らに、左京区大原八ヶ町の総氏神である江文神社がある。創建時期は不明であるが、金毘羅山（江文山）の南東麓に位置しており、古くより、周辺の大原郷八カ村の惣鎮守社、産土神として祀られていた。

井原西鶴の作品に当社の習俗が描かれており、また江戸時代中期ごろに成立した『山州名跡誌』にその名があがっており、例祭や神輿の存在も示される。

社殿は木造銅板葺流造であり、『都名所図会』にも同様の建築様式の社殿が描かれる。

社殿の建築年は不詳だが、社殿の前にある灯籠に明治39年（1906）の刻銘が見られる。



写真2-6-13 江文神社

○大原茶屋（田中家住宅）<登録有形文化財>

左京区の大原茶屋は、大原三千院の門前通りに南面する農家住宅である。江戸後期（1751～1829）に建築され、内外ともに農家の佇まいを良好に残す。

木造平屋建、入母屋造茅葺の四周に棧瓦葺の庇を巡し、桁行6間梁間4間規模の食違いのある四間取平面で、正面右手に土間を配している。



写真2-6-14 大原茶屋 (田中家住宅)

(b) 活動及び市街地の環境

○赤紫蘇あかしその栽培

高野川の川上に開けた大原の里は、かつて貴人が好んで隠棲した地であったことから分かるように、四季の移ろい豊かな自然風景を形成する。また、大原茶屋などの伝統的な様式の農家建築などが今もなお残り、里山の風情を一層引き立てる。この農家建築は北山における一般的なものであり、中規模の農家建築が建てられるのは近世半ば以降と考えられる。

夏には山に囲まれた青い稲田のなかに赤紫の紫蘇畑が入り混じって織りなす景色が美しい。この赤紫蘇は京漬物のしば漬けの材料にするもので、これ程多く作る紫蘇畑は珍しい。

このしば漬けは、古くからの大原の特産で、その昔、寂光院に住まわれた建礼門院に土地の人が献上したところ喜ばれて、しば漬けの名を賜ったのがはじまりだという。その歴史は古いようだが、元は自家用として漬けられていたようで、後に特産となり、明治後期に発行された『京都府愛宕郡村誌』には、大原村の名産として紹介される。今なお、三千院門前の土井志ば漬本舗等で特産品としてしば漬けが販売される。

大原でこの赤紫蘇を伝統的に作るのは気候条件が適しているからである。一般に、紫蘇は夏の始めには赤紫蘇の美しい色をしているが、梅雨が明けて土用に入り、気温が30度を超すようになると色が褪せてくる。ところが大原では夏でもそれ程気温が上がらないことから、夏のあいだ、美しい色を保ち続ける。

また、紫蘇の葉は、しなびやすいものであるため、地元で作る方がよいということも産地が大原から移動しない理由である。



写真2-6-15 しそ畑

○大原上野町おこない・お弓

上野町の村堂である浄楽堂では、成人の日に、おこない・お弓（市登録無形民俗文化財）が町の氏子の若者たちによって行われる。早朝より集落の正月飾りを集めて火を付けるトンドを行い、昼頃には全員揃って観音堂に入り、「サイコロ転がし」を行う。これは、碗に盛られたサイコロ状の大根の角切りを少しずつ転がせるもので、その由来等は伝えられていない。その後、トンドを行った田に、あらかじめ作りつけておいた的に向かって弓を引く。このお弓の行事は成人式の意味があったと考えられている。

祭礼の母体となっている座への加入について、元禄4年(1691)から安永3年(1774)に至る実態が「上野町えぼし帳」に見られる。



写真2-6-16 おこない・お弓

○大原八朔踊はっさくおどり

毎年9月、15、6歳以上の青年たちを中心に踊る大原八朔踊（市登録無形民俗文化財）は、江戸時代中期に都を中心に流行した踊口説おどりくどきで、明治初期に筆写された歌の台本が現存する。夜7時ごろ、人びとは町名を書いた高張提灯たかはりちようちんを掲げ、各町から出発の音頭を歌いながら江文神社へと向かう。江文神社の石段下、それぞれの町の提灯を掲げて集結し、一同が伊勢音頭を歌いながら、石段を上る。境内へは「寄せ歌」であるシオンガイナを歌いながら入場する。続いて各町からの音頭取りが四方に斎竹いみだけを立

て、注連縄を張った屋台に上り、輪になって道念と呼ばれる音頭を踊る。



写真2-6-17 大原八朔踊

大原地域は、京都の奥座敷と呼ぶにふさわしい、急峻な山地に囲まれた起伏に富む小盆地で、品格の高い文化財、山里の農家等と一体となった四季折々の豊かな自然の風趣にあふれた地域である。北部は、自然景観を背景とし、三千院参道や寂光院参道のみやげもの店・飲食店が沿道の町並みを形成し、南部はゆったりとした山間の里と呼ぶにふさわしい田園景観を形成する。



写真2-6-18 大原の町並み

このように、大原では紫蘇の栽培や寺社での祭礼など歴史に根ざした営みがなされており、寺社や農家建築とともに里山の風情を醸し出す。

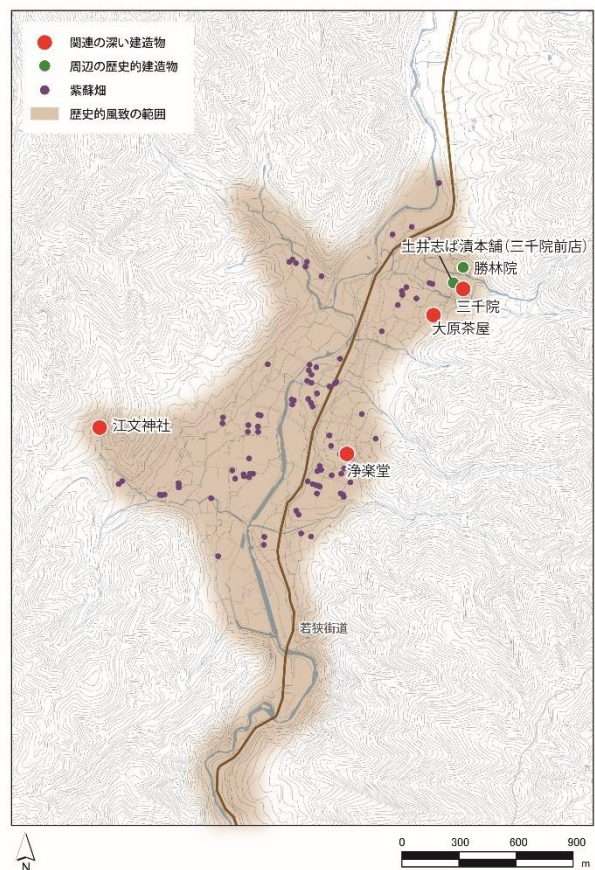


図2-6-4 大原の年中行事と山里の営み

b. 八瀬赦免地踊と八瀬かまぶろ

東に比叡山、西に若丹山地に挟まれた溪谷に位置する八瀬では、湯治場として知られる八瀬かまぶろや旅館があり、信じ触れ若狭街道を行き交う人々の疲れを癒す。

また、室町時代の風流踊りの面影を残す八瀬赦免地踊が住民によって継承されている。

(a) 建造物

○秋元神社

左京区の秋元神社は、八瀬天満宮社の境内にある神社で、比叡山と八瀬との境界争いを村民側に立って解決した老中秋元但馬守喬知への報恩のため、没年（正徳4年（1714））以降に村民が喬知の霊を祭ったのが起こりである。毎年10月スポーツの日（祝日）の前日に八瀬赦免地踊（市登録無形民俗文化財）が奉納される。

社伝によると、秋元神社は、八瀬天満宮社摂社として、正徳4年（1714）に建築されたと伝わる。登記簿等によれば、昭和32年（1957）の記録が確認できる。一間社流造の建物である。



写真2-6-19 秋元神社

○山ばな平八茶屋

左京区の平八茶屋は、若狭街道の茶屋として天正年間（1573～1592）に創業。明治期に茶屋から川魚中心の料理旅館へと業態を変えた。昭和初期から、創業当時から続く麦飯とろろ汁と川魚や海の幸を中心とした料理旅館となる。

主屋は、再建のため奉行所に出された申請書の控えが残っており、それによれば、寛政9年（1797）に建築されたものである。瓦葺き木造2階建てで、1階には糸屋格子や米屋格子が並び床几がつき、2階には虫籠窓と欄干手摺がつき、漆喰仕上げと木部は弁柄が塗られる。



写真2-6-20 山ばな平八茶屋

(b) 活動及び市街地の環境

○八瀬赦免地踊

八瀬赦免地踊（市登録無形民俗文化財）は、毎年10月、八瀬天満宮社の摂社である秋元神社で行われる祭礼で、別名「燈籠踊り」とも呼ばれる。もとは、室町時代初期に始まったとされる「燈籠踊り」で、江戸中期に祠を建て、踊りを奉納するようになったと伝えられており、明治後期に発行された『京都府愛宕郡附誌』にその記録がある。踊りに使われる切り灯籠は、動物などの図柄を透かし彫りにして作られたもので、毎年八瀬の4つの町ごとに一対作成する。

祭礼は十人頭の合図により始まり、伊勢音頭に合わせ、門口（村の中心地）に向かう。その後、十

人頭を先導で神社へと進む。馬場では、神社に向かって進む行列が一行に並び、少女の踊り子たちの持つ赤い提灯と灯籠着とよばれる美しく化粧をした13歳から14歳の少年たちが、頭上にいただいた灯籠の蝋燭がゆれて幻想の明かりを見せる。

石段に着くと、「道歌」が音頭取り衆に歌われ、石段を上がる。屋形に着くと灯籠着はゆっくりと音頭に合わせてその周りをまわる。舞台では、少女によって汐汲み踊り、花摘み踊りが奉納される。

踊りと踊りのあいだに俄狂言（にわかきょうげん）をはさむ点や、切り灯籠に室町時代の風流踊りの面影を残す。



写真2-6-21 八瀬赦免地踊

○八瀬かまぶろ

左京区の八瀬かまぶろ（市登録有形民俗文化財）は、土石で作られた蒸し風呂であり、かつて八瀬で生産され、京に運ばれた黒木（燃料用に生木を乾燥して木炭を分離したもの。軽くなり運搬に適する）を生産する窯と共通した構造が特徴である。壬申の乱で大海人皇子が背に矢を受けた際、窯風呂に入って傷を癒したという、八瀬の地名伝承とも関わる。

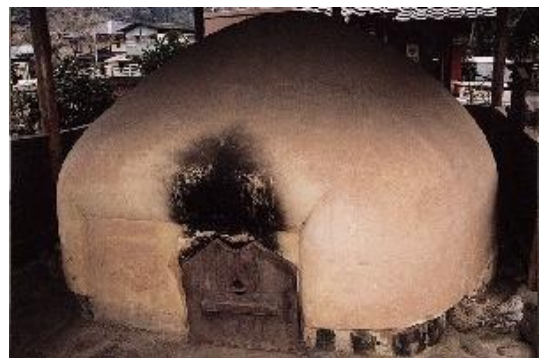


写真2-6-22 八瀬かまぶろ

『言経卿記』の文禄4年（1595）4月4日条にも記述されており、近世初期には療養目的の湯治場として広く知られていた。江戸時代に入るとさらに発展し、正徳5年（1715）には、16軒を数えたが、明治に入ってから利用されなくなり、現存する1基を除き取り壊された。そのかまぶろは、明治28年（1895）

に京都で行なわれた内国勸業博覧会を記念して復元作製されたものと考えられている。

今なお、若狭街道沿いには、八瀬かまぶろ温泉ふるさとや山ばな平八茶屋など、かまぶろを備える旅館があり、旅人の疲れを癒す。

八瀬地域は、高野川の溪谷における、背後の自然に溶け込んだ谷地の伝統的な民家や、自然石積み、庭木等の雰囲気、瓦で統一された屋根が山間の自然的な町並みを形成する。



写真2-6-23 八瀬の町並み

このように、比叡山の麓に位置する八瀬とその街道沿いでは、歴史的な踊りや旅人を癒すかまぶろ温泉が自然風景と一体となり、京と密接に関わってきた街道の門前町としての歴史を感じさせる。

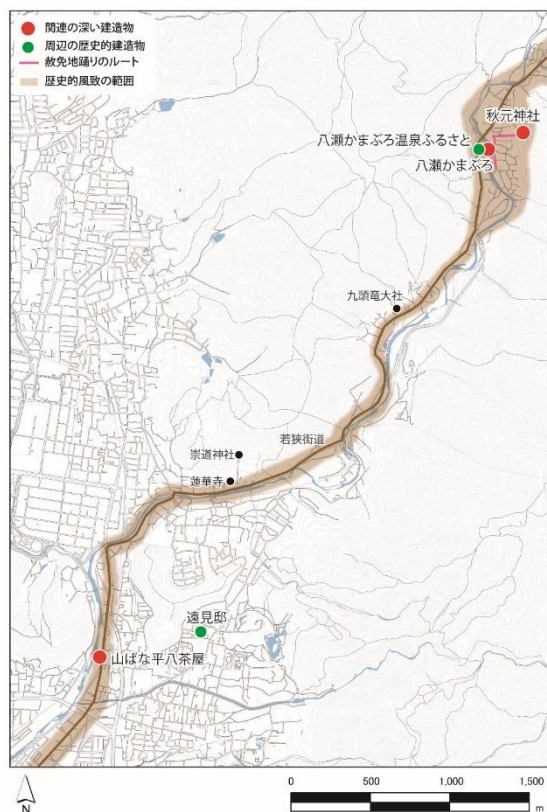


図2-6-5 八瀬の赦免地踊と八瀬かまぶろ

(ウ) まとめ

京の街道は、京から全国に通じる道であったことから、周辺地域における人々の営みは京の文化や京の人々の生活とも繋がり、京とともに歩んできた往時の姿を今に伝える。

京の街道のなかでも、鞍馬街道や若狭街道は古くから物流の道や参詣道として利用されており、街道沿いに集落が形成された。山や川などの自然環境に恵まれていたことから、寺社仏閣も古くから建立された。今なお、自然景観を背景とした街道沿いの集落が形成する歴史的な町並みの中で、信仰と自然環境が調和した集落独自の祭りや年中行事が行われており、年間を通して歴史的風致を感じることができる。

(3) 旧街道でつながる山科盆地の祭りに見る歴史的風致

山科盆地は、京都盆地の東に位置し、京都市山科区及び伏見区醍醐地区に及ぶ。山科盆地のほぼ中央を山科川が流れており、醍醐を経て宇治川に合流する。大和と近江を結ぶ太古・古代の重要な道筋にあたり、天智天皇6年(667)に大津京に遷都すると、奈良と大津を結ぶ街道が開かれ、山科盆地の重要性はさらに増した。

飛鳥時代、日野の地に中臣鎌足が邸宅を建て、その後藤原北家一族である日野家が繁栄し、日野一族の親鸞が永承6年(1051)に法界寺を建立した。貞観16年(874)には、空海の孫弟子にあたる聖宝が醍醐寺を開山する等、古代から開拓され、皇室や貴族とも深い関わりを持ち、歴史を刻んできた。

中世には、蓮如により山科本願寺・寺内町が築かれ、宗教都市としても機能していた。

山科盆地は、交通の要衝地であり、江戸時代には河港都市伏見を起点に山科川の左岸を山麓沿いに日ノ岡峠に走る小栗栖街道と、右岸を大宅を経て山科追分に向かう旧街道である奈良街道の利用が盛んであった。

また、「忠臣蔵」ゆかりの地としても知られており、時代ごとに文化を形成してきた山科盆地は、町並みだけでなく祭りにも歴史文化が色濃く残される。

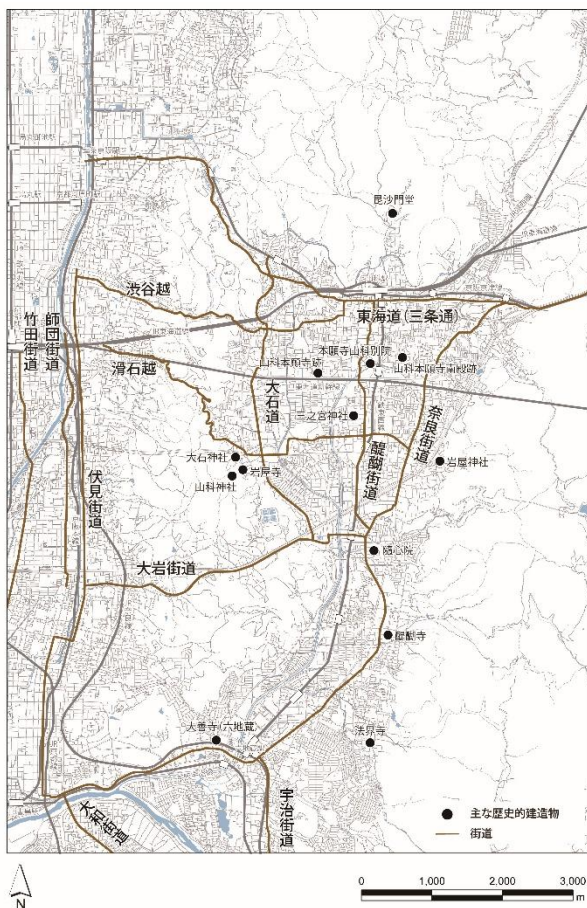


図2-6-6 山科盆地の主な旧街道

(7) 寺社のまつり

a. 山科寺内町の花まつり

花まつりは、釈迦の誕生を祝う仏教行事であり、山科では、子供たちも参加する地域の行事となっている。

(a) 建造物等

○山科本願寺跡及び南殿跡<史跡>

山科区の山科本願寺は、浄土真宗中興の祖である蓮如が、本願寺再興のため、山科の地に文明10年(1478)から建設を開始したものである。

山科本願寺は、「野村本願寺古御屋敷之図」(山科区光照寺所蔵)等江戸期の古絵図によると、御影堂や阿弥陀堂等、本願寺の堂舎が建ち並ぶ「御本寺」、法主の家族や坊官たちの屋敷がある「内寺内」、寺に関わる職人や商人等の町衆の居住区である「外寺内」の3つの郭から構成され、それぞれの郭と外周は、土塁と濠により、厳重に区画することによって、寺内町と呼ばれる独立した空間を築き上げていた。

延徳元年(1489)に蓮如は、法灯を子の実如に譲り、本願寺東の地に隠居寺を設け、この地は実如の住む北殿に対して南殿と称された。

天文元年(1532)に山科本願寺が焼き討ちにあった後も山科本願寺跡(史跡)周囲には土塁が残されており、山科中央公園や江戸時代に山科郷土であった奥田家の敷地内にある大きな土塁は当時の姿を偲ばせる。



写真2-6-24 奥田家住宅を囲う山科本願寺土塁

○本願寺山科別院(西御坊)

山科区の本願寺山科別院は、天文元年(1532)の山科本願寺焼き討ち後、享保17年(1732)第15代住如により、北山別院の旧堂を廟所の東側に移築し、当初、聖水山舞楽寺として建てられた。

この御堂が手狭になったため、安永3年(1774)に現在の本堂が建立されたと伝わる。本瓦葺、正面から三方にかけて広縁と落縁が廻る。続いて天明元年(1781)に蓮如の300回遠忌にあたり、鐘楼・太

鼓楼，茶所等が増築されたと伝わる。

中宗堂は、文政6年（1823）建立され、明治17年（1884）に蓮如御木像が安置され、以後現在に至る。正門前の石灯籠に寛政2年（1790）の刻銘が残されている。



写真2-6-25 本願寺山科別院（西御坊）

(b) 活動及び市街地の環境

毎年釈尊の誕生した4月8日に、草花で飾った花御堂（釈尊誕生の地、インドのレンビニ花園をかたどる）のなかに誕生仏の像を安置して、甘茶（天は感動して甘露の雨を降らせたという故事による）を注いでお釈迦様の誕生を祝う花まつりが行われる。

『京の年中行事』（昭和35年発行）には、各寺院で行われる灌仏会（花まつり）の歴史が記載されており、1120年余前仁明天皇の承和7年（840）に宮中で行ったことが記載される。また、大正6、7年（1917、1918）頃京都仏教少年連合団と京都仏教護国団により白象を引くのを模し、児童達により市中を練り歩くようになったことも記載される。

本願寺山科別院では、毎年4月8日に近い日曜日に花まつりが催され、白い象の形をした白象を引いた子供らの行列が本願寺山科別院（西御坊）から山科駅までの大通りを巡行する。



写真2-6-26 花まつり白象巡行

この一帯は、近世以前に存在した山科七郷の一つである野村郷の西部で、近世には西野村と呼ばれた地域である。周辺には、東本願寺山科別院長福寺（東

御坊）、蓮如上人の廟所などがあり、また、本願寺寺内町には山科郷士の血を継ぐ奥田家の住宅がある。山科本願寺周囲を固めた土塁が今も一部残っており、山科中央公園の一角を構成する土塁は市民憩いの場となっている。

近代初期まで、のどかな農村風景を造っていた東西本願寺山科別院の一帯は、住宅地化が進んだが、両別院のゆったりした本堂と境内地、西別院の山科川沿いの境内側の築地塀と水路、山科中央公園の土塁が、地域の景観要素となり、歴史的な町並みを形成する。

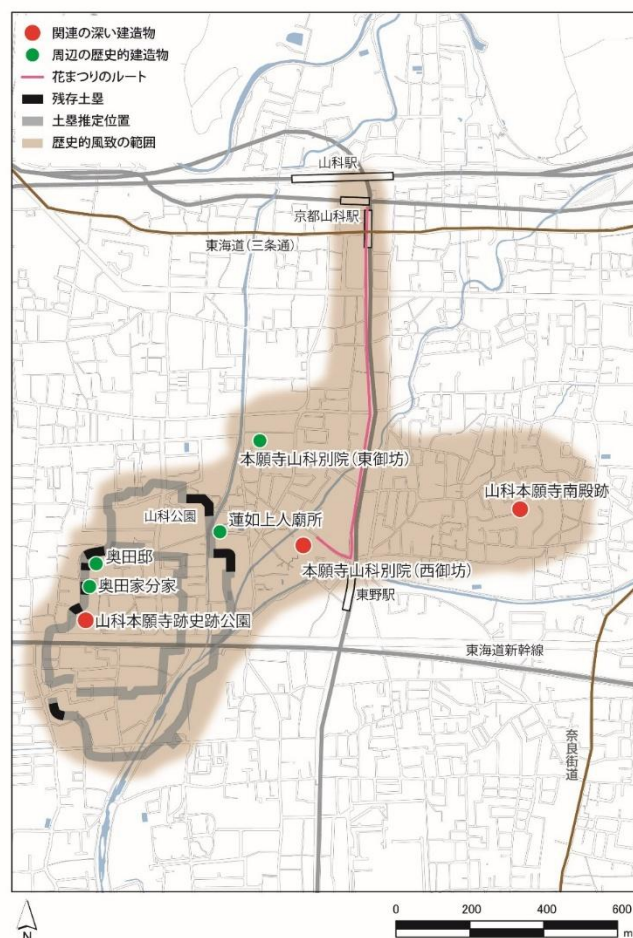


図2-6-7 山科本願寺跡周辺

b. 神輿で賑わう山科祭

寛平10年（898）に官祭として始まったとされる、山科神社の山科祭は、山科の各地域へ広がり、毎年10月になると山科地域全域で祭りや神輿巡行が見られる。

(a) 建造物

○三之宮神社

山科区の三之宮神社は、延喜年間（901～922）の創建であり、社伝によれば、本殿は、慶長18年（1613）に改築された。登記簿等では、昭和32年（1957）の記録が確認できる。本殿は、三間社流造、銅板葺。

かつては、西岩屋大明神(山科神社)の三之宮とされており、明治10年(1877)まで山科祭では山科神社とともに神輿巡行を行っていた。



写真2-6-27 三之宮神社本殿

○山科神社本殿<市指定有形文化財>

山科区の山科神社は、社伝によれば、宇多天皇の勅命により寛平9年(897)に創建された。この地の豪族宮道氏の祖神として、また山科一ノ宮とも呼ばれて産土神として人々の崇敬を受けて栄えてきた。

また、元禄14~15年(1701~02)に赤徳浪士の大石良雄が山科の里に隠棲していた際に、当社奥の院岩屋神社に参籠して、大願成就を祈ったといわれる。

本殿(市指定有形文化財)は三間社流造、檜皮葺であり、室町時代後期に建てられた可能性はあるが、現在の形態になったのは江戸時代前期と考えられる。鳥居には、万治3年(1660)の刻銘が見られる。

盛時には、社領を丹波、山城に持ち、社殿の規模も大きかったが、度々の兵火のため焼失し、現在は、本殿のほか権殿、拝殿、神庫などが残る。



写真2-6-28 山科神社本殿

(b) 活動及び市街地の環境

山科祭は、『本朝月令』によると、寛平10年(898)年3月に式内社山科神社の祭礼が官祭とされた。

中世には、官祭ではなくなり、山科の郷民たちに支えられ、岩屋大明神の祭りとして行われていたが、近世には山科の各地域へと拡大し、五穀の豊作を神様に感謝し神輿巡行を伴う秋の「大祭」を中心に行

われていた。

今日では、10月の第3日曜日に大祭や神輿巡行を11社(三之宮神社、山科神社、岩屋神社、朝日神社、白石神社、諸羽神社、勸修寺八幡社、若宮八幡宮等)21地域と山科区の大半で行う。

かつて、山科神社は「一之宮」、中臣神社はその「二之宮」、三之宮神社は「三之宮」と呼ばれていた。また岩屋神社と合わせて「山科宮四座」と呼ばれる。中臣神社は、現在も山科神社の山科祭の御旅所になっている。

三之宮神社の神輿巡行は午前7時に子供神輿とともにスタートし、山科東野から西野の氏子の家々を夕方まで廻り、「ホイット、ホイット」と神輿の差し上げや手打ちを行う。神輿巡行ルートには幟が立ち、氏子の玄関先では御献酒や神饌料が奉納される。六兵衛池公園近くでの北花山六所神社の神輿との担ぎあい、祭りの見所の一つでもある。



写真2-6-29 三之宮神社と六所神社の神輿担ぎあい

山科神社の神輿巡行は、万治3年(1660)の刻銘がある大鳥居をくぐり、各所を廻って中臣神社に参り、さらに氏子域を巡行する。

岩屋神社でも、大宅、大塚、柳辻、井上町、小野、厨子奥、日の岡、御陵の氏子域を三社の神輿が、巡行し、岩屋太鼓の豪快な音があちこちで聞こえる。この日は区内の11箇所の神社で神輿巡行が行われ、太鼓の音色や担ぎ手の掛け声で山科区中が祭り一色に染まる。

山科地域は、平安時代の頃にはすでに、山城国宇治郡山科郷という名で呼ばれ、山科本願寺跡や江戸時代の風景を思い起こさせる旧東海道の遺跡などが残る。三方を山で囲まれた盆地で、戦後スプロール的に宅地開発が進む中、旧街道沿いには農家住宅などの古い建造物が点在し、歴史的な町並みが残る。

新しく住民になった人々も、古くからある神社の歴史的な祭りへの参加や、町家や農家住宅など歴史的な建造物の前を神輿が巡行する様子を眺めること

で、山科の歴史の奥深さと人々の営みの活気を肌で感じることができる。

表2-6-1 山科祭神輿巡行神社一覧(別表)

番号	神社名	氏子域
①	三之宮神社	東野, 西野
②	山科神社	西野山
③	岩屋神社	大宅, 大塚, 榎辻, 御陵, 日ノ岡(一部) 厨子奥, 小野
④	八幡宮(百々)	西野山(一部)
⑤	朝日神社	栗栖野
⑥	白石神社	小山
⑦	諸羽神社	四ノ宮, 竹鼻, 安朱, 髭茶屋
⑧	八幡宮(吉利俱)	勧修寺
⑨	若宮八幡宮	音羽, 小山(一部), 髭茶屋
⑩	北花山六所神社	北花山, 西野(一部)
⑪	上花山六所神社	上花山

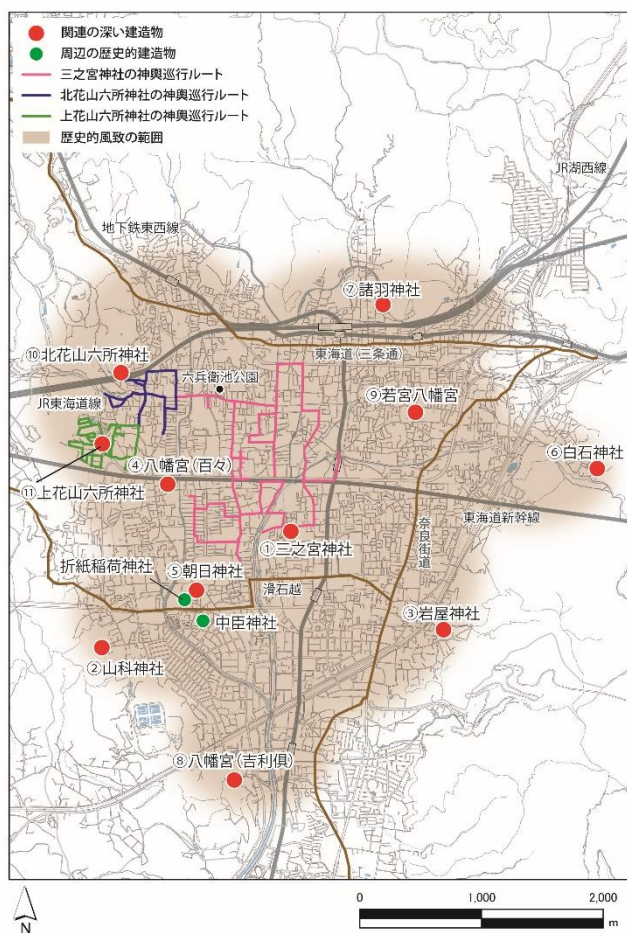


図2-6-8 山科祭

(1) 区民がつくる祭り

山科盆地には、赤穂浪士大石内蔵助が討入り前にこの地に住んでいたことからゆかりの地や史跡が多くあり、赤穂浪士を偲ぶ祭りも開催されている。

a. 忠臣蔵四十七士の行列から続く山科義士まつり

忠臣蔵四十七士の行列を原形とする「山科義士まつり」は、大石内蔵助と赤穂の義士たちを偲ぶとともに、山科の住民と企業、行政が連帯感を高める行事にもなっており、山科の年末の風物詩として知られる。

(a) 建造物

○岩屋寺

山科区の岩屋寺は、平安時代に天台宗の寺院として創建され、隣接する山科神社の神宮寺であったとされる。織田信長の兵火を始め幾度か焼失し、江戸末期の嘉永年間(1848~1854)に曹洞宗寺院として復興されたと伝わる。大石内蔵助が討入り前の1年余を過ごした閑居跡としても知られる。

本堂は、棟札及び鬼瓦銘から嘉永7年(1854)に再建されたものと分かる。入母屋造平入、棧瓦葺。

境内には毘沙門堂や大石内蔵助邸の古材にて造られた茶所が残る。



写真2-6-30 岩屋寺本堂

○大石神社

山科区の大石神社は、昭和10年(1935)に浪曲師の吉田大和之丞が、「忠臣蔵」を演じて人気を得たのに感謝して私財を投じて創建した。

拝殿は、『府社以下神社明細帳下調書』によると昭和10年(1935)の建築で、三間社流造であるが、屋根には神明造で用いられる千木、鯉木が載る。



写真2-6-31 大石神社拝殿

(b) 活動及び市街地の環境

山科の地は、大石内蔵助が吉良邸討ち入りまで隠棲するなど、赤穂浪士とのゆかりが深い土地であり、義士にまつわる遺跡が多く残る。昭和31年(1956)、山科区を通る東海道線が電化されたことを記念して、大石内蔵助や赤穂浪士に扮した人々が山科区内を練り歩く忠臣蔵四十七士の行列が行われた。この行列は、その後同49年(1974)より始められる「山科義士まつり」の原形となった。



写真2-6-32 義士行列(忠臣蔵四十七士の行列)(昭和31年)(出典:『京都写真館 なつかしの昭和20年~40年代』(平成22年淡交社))

山科義士まつりの義士隊は、山科区内各学区の地域住民で構成されており、地域の施設(東部文化会館等)や大石内蔵助等義士に縁のある寺社(岩屋寺、大石神社、毘沙門堂等)を巡る。

また、東映太秦映画村の協力を得て、芝居が展開されるほか、幼稚園児による子供義士隊や女性陣による大石音頭や元禄花見踊りが奉納される。

義士隊の出発地点である毘沙門堂参道周辺は、安祥寺山麓の緑豊かな景観と、住宅地の生け垣や和風塀が一体となった町並みを形成する。到着地点である大石神社周辺は、山麓の緑豊かな景観と近隣の寺社や農家住宅が歴史的な町並みを形成する。



写真2-6-33 毘沙門堂を出発する義士隊(フォトコンクール入賞作品)



図2-6-9 山科義士まつり

(コラム) ずいしんいん 随心院のはねず踊り

はねず踊りは、小野小町と彼女を慕った深草の少将の物語を、2人に見立てて華やかな衣装に身をつけた少女たちが踊るものである。「はねず」とは薄紅の梅のことで、随心院の紅梅も古くからこの名で親しまれていた。

昭和48年(1973)、この地で江戸時代、盆に青年たちに踊られていたという「はねつ踊」についての古老の記憶の断片や言い伝え、古文書等を参考に新たに作詞作曲し、小野小町に因んだ振付をした踊りとしてはじめられた。毎年3月の最終日曜日に「はねず踊り保存会」の小野小学校の4、5、6年の女子が随心院の境内地で踊りを披露する。

今なお、はねず踊りは、小野梅園の梅の花とともに守り継がれている。春の訪れのころには、周囲を梅の香りに包みこみながら、はねず踊りが開催され、人々に春の到来を感じさせる。



写真2-6-34 はねず踊り (提供: 随心院)

○随心院境内<史跡>

山科区の随心院は、空海より8代目の弟子に当たる仁海が正暦2年(991)にぎゅうひさんまんだらじ牛皮山曼荼羅寺を創建し、その後、第五世増俊阿闍梨によって曼荼羅寺の子房として建立された。承久や応仁の乱の際に被災し、慶長4年(1599)に本堂が再建された。

随心院の位置する小野地区は、平安時代に小野一族が栄えた場所と伝わり、随心院にある小町文塚、化粧の井戸、苔の庭など小野小町ゆかりの地が多く残る。



写真2-6-35 随心院

(ウ) 受け継がれる伝統行事

旧街道の奈良街道周辺には、市民が参加し今なお継承されている伝統行事がある。醍醐寺では、五大力さんや豊臣秀吉ゆかりの花見行列が行われ、法界寺では地域の子供たちも賑わう裸踊が行われている。

a. 醍醐の花見行列と五大力さん

醍醐寺で2月23日に行われる「五大力さん」は、災難・盗難除けに御利益があり、そのお札を求める参拝客で賑わう。

また、醍醐寺は桜の名所として知られ、特に豊臣秀吉の行った花見は有名である。

(a) 建造物

○醍醐寺金堂<国宝>

伏見区の醍醐寺は、空海の孫弟子である聖宝が貞観16年(874)に創建したのを受け、醍醐山上から山麓にいたる広大な寺域に堂宇が建立された。中でも、天曆6年(952)に完成した五重塔(国宝)は、京都府下最古の木造建造物であり、内部の障壁画も国宝(美術工芸品)に指定されている。

平安時代から三宝院など多くの支院も建築されるなど真言宗の中心寺院として繁栄してきたが、応仁の乱で五重塔を除く堂宇の大半が焼失した。

その失われた伽藍の復興の契機となったのが豊臣秀吉が慶長3年(1598)に行い、後に「醍醐の花見」と称された豪華絢爛な花見であり、現在の金堂(国宝)もこの頃和歌山県から移築された。



写真2-6-36 醍醐寺金堂

○下村家住宅主屋<登録有形文化財>

伏見区の下村家住宅は、かつては村全域が醍醐寺領だった醍醐寺村域内に建つ農家住宅。

この家の主人が和歌・俳句をよく詠んだことからおおたがきれんがつ大田垣蓮月と親しい間柄であり、蓮月が晩年の一時期を過ごした離れが残る。

下村家住宅は、江戸後期(1751~1830)に建築され、東西棟の入母屋造茅葺、西側に切妻造棧瓦葺の座敷二室を落棟にして張り出す。醍醐寺の南正面の

黒門の前に位置し、醍醐寺と一体となり歴史的景観を形成している。



写真2-6-37 下村家住宅

(b) 活動及び市街地の環境

醍醐寺では、毎年2月23日に「五大力さん」(五大力尊仁王会)が営まれる。五大力尊仁王会は、不動明王など五大明王の力を授かり、その化身・五大力菩薩によって国の平和や国民の幸福を願う行事で、その歴史は延喜7年(907)まで遡ると伝わる(『京の年中行事』(昭和35年(1960)発行)より)。

五大力さんでは、災難・盗難除けのお札「御影」が、この日に限って授与される。京都の町家や老舗はもちろん、各家庭の出入り口に貼られる。このお札を求めて、早朝から夕刻まで人の列が途切れることはない。



写真2-6-38 醍醐寺五大力尊仁王会

さらに、近年では、力自慢の男女が巨大な鏡餅を持ち上げる時間を競う「餅上げ力奉納」が行われ、境内は一層の賑わいが見られる。

また、醍醐寺周辺は平安時代から「花の醍醐」と呼ばれるほどの桜の名所である。この時期、世界文化遺産の境内を背景に枝垂れ桜、染井吉野、山桜、八重桜など数多くの桜が順番に咲き誇る。

慶長3年(1598)に豊臣秀吉が行った「醍醐の花見」にならい、毎年4月の第2日曜日に「豊太閤花見行列」が開催され、終日境内は賑わう。『拾遺名所図会』(天明7年(1787)刊行)にも「醍醐花見」の様子が描かれ、昭和30年代の写真にも花見の賑わい

が写る。200万坪以上の広大な敷地が広がる醍醐寺には境内を背景に数多くの桜が咲き誇り、そのなかで行われる花見行列は、豪華絢爛な当時の雰囲気と人々の賑わいを現代でも体感させるものである。

醍醐地域は、醍醐寺・三宝院の重要な景観要素、三宝院前の下村家住宅などの伝統的な農家群や、わずかに残る独立丘陵の緑地部分等が、この地域の原風景を伝える。特に、醍醐三宝院前の旧街道の奈良街道は、境内側の築地塀や松林等の組み合わせが整った景観と、これらに呼応するように断続的に続く街道の町家や土塀のある民家が風趣あるたたずまいを醸し出している。

「五大力さん」や「豊太閤花見行列」といった行事の日には、こうした町並みを背景に、多くの人が行き交い、醍醐寺境内や街道沿いは活気づく。

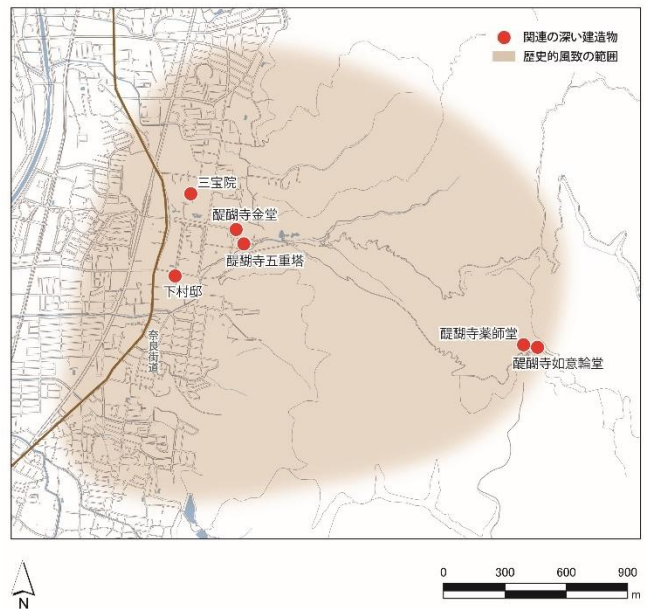


図2-6-10 醍醐の五大力さんと花見行列

b. 法界寺の日野裸踊

法界寺では、毎年1月14日の夜に、地元の子供と大人が参加する日野裸踊が行われており、多くの人で賑わう伝統行事となっている。

(a) 建造物

○法界寺阿弥陀堂<国宝>

伏見区の法界寺は、日野資業が永承6年(1051)に薬師堂を建立した寺であり、藤原氏の北家にあたる日野家の菩提寺である。浄土真宗の開祖・親鸞が日野有範の息子として生まれた場所でもある。

阿弥陀堂(国宝)は、承久3年(1221)の火災後の再建と考えられており、鎌倉前期(1226年頃)に再建され、桁行5間、梁間5間の身舎に裳階を巡らす。境内地は、市指定史跡となっている。



写真2-6-39 法界寺阿弥陀堂

(b) 活動及び市街地の環境

日野裸踊（市登録無形民俗文化財）は、江戸時代初期には既に行われていた行事であり、『日次紀事』には日野のオシアイと記載される。

元旦から14日間、薬師堂で五穀豊穡、万民快樂、所願成就を祈る修正会が行われ、結願日にあたる1月14日の夜、地元の少年（日野小学校児童）と青壮年がそれぞれふた組に分かれて、禰一つの裸形となって国宝の阿弥陀堂広縁で体を激しくぶつけ合う。

日野裸踊当日は、薬師堂で法要が行われ、先に「子供の部」、その後「大人の部」が行われる。最初に願い事を絶叫しながら汲み上げられた井戸水を頭からかぶる「水垢離」をとり、「頂来、頂来」と掛け声をあげながら、阿弥陀堂広縁で寒さを吹き飛ばすように互いに体を激しくぶつけ合う。寒さと井戸水の浴びた身体から湯気が立ち上る熱気に、見物客も見とれる。

醍醐・日野地域は、東西の山地が近接し、その中間に独立丘があり、緑豊かな地形が形成され、醍醐寺等を核として、かつては山地と寺院、そしてこれを取り巻く農村という構図を構成していたが、近年では住宅地化が進む。日野の法界寺周辺や日野川沿いは、今も農家住宅や農地が残り、寺院とともに歴史的な町並みを形成する。



写真2-6-40 法界寺裸踊の様子(大人の部)

このように、法界寺で行われる裸踊は、地域の子

供から大人まで参加する行事であり、掛け声が境内に響きわたり、活気と地域の一体感を感じさせる。

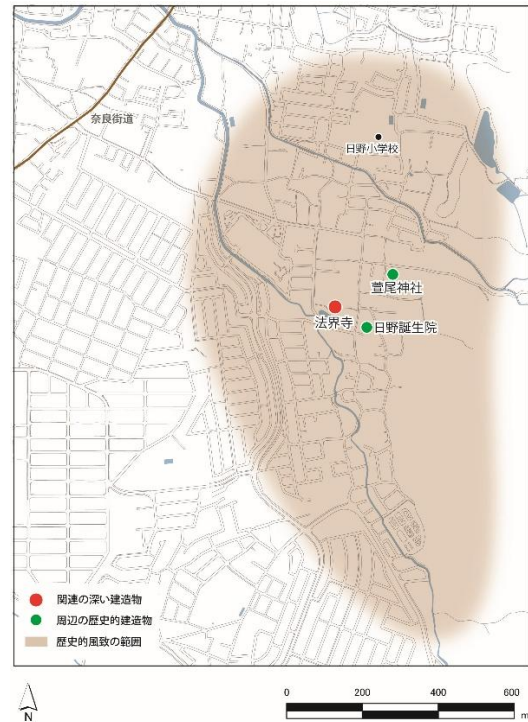


図2-6-11 日野裸踊

(I) まとめ

三方を美しい緑の山に囲まれた山科盆地では、盆地中央に山科川が流れ、自然環境に恵まれており、旧奈良街道は古くから古都を結ぶ街道として、平安期以降は東の玄関口として発展してきた。

山科盆地には、小野小町、蓮如や大石内蔵助などの偉人たちが暮らした足跡を今なお感じる場所が多くある。また、大石内蔵助ゆかりの山科義士まつりや日野裸踊などが地域の人々によって継承されており、時代ごとに形成された文化が、旧街道周辺の寺院や農家住宅などが建ち並ぶ歴史的な町並みの中で今なお育まれている。

(4) おわりに

千年の時を超えて都であった京都には、日本全国から数多くの街道が京に通じ、街道沿いに集落が形成され、自然や信仰などの影響を受け集落独自の文化を形成した。鞍馬街道、若狭街道など平安京に通じる街道のほか、かつての都を結ぶ奈良街道が通る山科盆地など、それぞれ街道沿い周辺の集落において、古からの人々の行き交いや豊かな自然環境によって育まれた活動が継承されている。

京都では、街道沿いの自然環境と寺社仏閣などが調和した集落のなかに、様々な信仰や独自の暮らしの営みが息づき、京の街道とその周辺の歴史的風致を形成している。

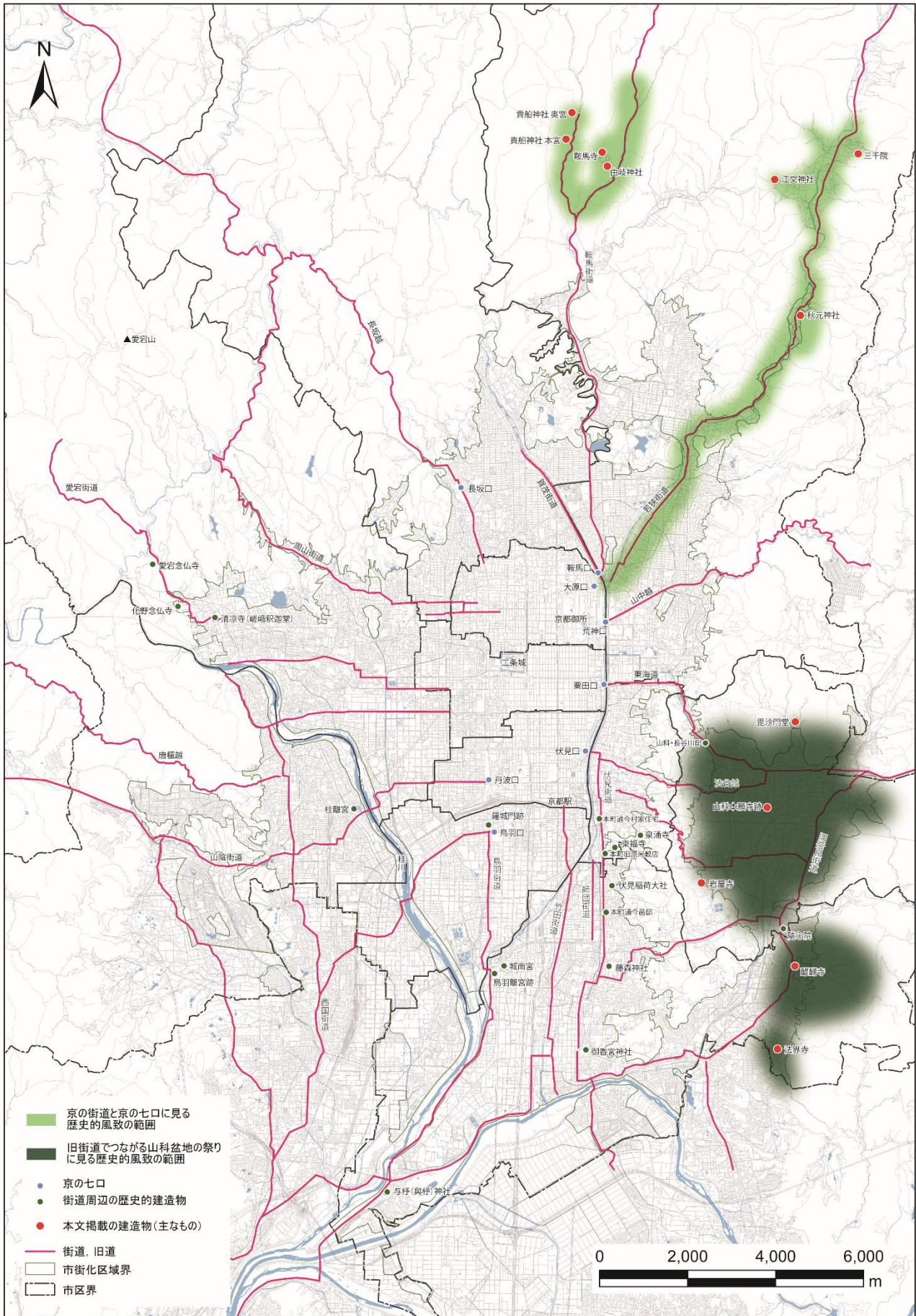


図2-6-12 京の街道とその周辺に見る歴史的風致（総括図）